

藤田浩子の 少し昔のこと 〈99〉

イナゴ ②

イナゴ捕りのことを書いたついでに、6年生の時の担任の悪口を書きます。私は疎開っ子でしたから、じゃがいも畑にたかってくるアオムシを手でつぶすのも、穴を掘って畑を荒らしていくモグラの穴を埋めるのも、ウサギの餌にするために山から葛の葉を採ってくるのも、蚕に食べさせる桑の葉を採ってくるのも、なにをやっても、地元の子にはかないませんでした。でも友達には男の子も女の子もそんな私を受け入れてくれましたから、私はそのことで卑屈になったりはしませんでした。なにしろお手玉は上手でしたし、あやとりもゴム跳びも上手で、積極的な（別の言葉でいえばお転婆な）私でしたから、友だちは、仲間として受け入れてくれたのです。

いつまでも「疎開っ子」を受け入れてくれなかったのが6年のときの担任でした。



「イナゴもろくに捕れないようなヤツはドッジボールをする資格がない」と言って、体育の時間は仲間外れでした。ま、それは仕方がないかもしれないと思って納得していたのですが、なんと納得できないのが国語の時間で「病院」に「びょういん」とかなをふると×でした。「びょうえん」とふらないと○にならないのです。「駅」は「いき」、「繊維」は「せんえ」です。校長先生に言っても「あの先生はザイゴ（田舎の田舎）の人だから」で終わり。先生不足のときでしたから、辞められても困ると思われたのでしょう。兄が見かねて福島の地方紙「福島民報」に「病院はびょうえんか」と投書しましたが、「いやだいやだ、疎開っ子はこんなことで騒ぎ立てるから」で終わりでした。まあある意味、田舎の文化に信念をお持ちだったのでしょう。静かな田舎町が、生意気な都会っ子に荒らされるのが我慢できなかったのかもしれませんが、でも、その先生以外は疎開っ子もちゃんと受け入れてくださる先生たちで、住み心地のいい町でした。

リレー連載 <232>

わたしの大好きな絵本

後藤 凌希（ベリーズ）

この作品に出てくるオニ達はおにぎりがだいすきで、人を脅かすことよりも目の前のおにぎりのことしか考えていません。ある日いたけとりにやってきた人間たちと出会いますが、人間たちはオニを見て大慌てで逃げていきました。そこから時間が経ち、落とし物だった箱の中身がおにぎりだったことに気づいて一口食べるのですが…そのおいしくないこと。腐っているのにも気が付かず、“人間たちにもおいしいおにぎりを届けてあげよう”と物語が始まっていきます。おいしいおにぎりのため、一生懸命なオニ達がとても素敵なのです。

お話の途中に何度もおにぎりが出てくるのです

『オニじゃないよ おにぎりだよ』

作： シゲタサヤカ

出版社： えほんの杜

が、そのおにぎりが多さに驚きです。子ども達と見終わって、「（おにぎりを指さして）これは梅ぼし？」「何味？」「これ食べたい！」とおにぎりトークで盛り上がりました。

オニ達の表情の緩さや最後のシーンの面白さに大人もくすくと笑える1冊、ぜひ見てください。

